

待降節第3主日礼拝説教「喜びの祝宴に備えて」予稿

日本基督教団石神井教会 2024年12月15日

【旧約聖書日課】士師記 13章2～5節

²その名をマノアという一人の男がいた。彼はダンの氏族に属し、ツォルアの出身であった。彼の妻は不妊の女で、子を産んだことがなかった。³主の御使いが彼女に現れて言った。「あなたは不妊の女で、子を産んだことがない。だが、身ごもって男の子を産むであろう。⁴今後、ぶどう酒や強い飲み物を飲まず、汚れた物も一切食べないように気をつけよ。⁵あなたは身ごもって男の子を産む。その子は胎内にいるときから、ナジル人として神にささげられているので、その子の頭にかみそりを当ててはならない。彼は、ペリシテ人の手からイスラエルを解き放つ救いの先駆者となるう。」

【使徒書日課】フィリピの信徒への手紙 4章4～9節

⁴主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。⁵あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。⁶どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。⁷そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。

⁸終わりに、兄弟たち、すべて真実なこと、すべて気高いこと、すべて正しいこと、すべて清いこと、すべて愛すべきこと、すべて名誉なことを、また、徳や称賛に値することがあれば、それを心に留めなさい。⁹わたしから学んだこと、受けたこと、わたしについて聞いたこと、見たことを実行しなさい。そうすれば、平和の神はあなたがたと共におられます。

【福音書日課】マタイによる福音書 11章2～19節

²ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、³尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。」⁴イエスはお答えになった。「行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。⁵目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、重い皮膚病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り、貧しい人は福音を告げ知らされている。⁶わたしにつまずかない人は幸いである。」⁷ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆にヨハネについて話し始められた。「あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか。風にそよぐ葦か。⁸では、何を見に行ったのか。しなやかな服を着た人か。しなやかな服を着た人なら王宮にいる。⁹では、何を見に行ったのか。預言者か。そうだ。言っておく。預言者以上の者である。」

¹⁰『見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの前に道を準備させよう』

と書いてあるのは、この人のことだ。¹¹はっきり言うておく。およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。しかし、天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である。¹²彼が活動し始めたときから今に至るまで、天の国は力づくで襲われており、激しく襲う者がそれを奪い取るうとしている。¹³すべての預言者と律法が預言したのは、ヨハネの時までである。¹⁴あなたがたが認めようとするれば分かることだが、実は、彼は現れるはずのエリヤである。¹⁵耳のある者は聞きなさい。¹⁶今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供たちに似ている。

17 『笛を吹いたのに、
踊ってくれなかった。
葬式の歌をうたったのに、
悲しんでくれなかった。』

18 ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、¹⁹人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。しかし、知恵の正しさは、その働きによって証明される。』

来たるべき方【こども説教のために】

アドヴェントの第三のロウソクは、「喜び」のしるしのバラ色。御子ご降誕の祝いは、近いのです。どなたにも「喜び」の知らせをお届けしましょう。

ご降誕の祝いに、わたしたちは、御子をお迎えします。幼子としてお生まれの方をお迎えします。まだ名も付けられる前の赤ん坊です。

もちろん、わたしたちは、その赤子に付けられる名を知っています。「イエス」という名を付けられるのです。この「幼子イエス」が成長し、大人になったとき、わたしたちを教え導いてくださる方になられるでしょう。弟子たちが従い、わたしたちも後にお従いするお方、「主イエス」です。

でも、このお方で間違いないのでしょうか。わたしたちがクリスマスにお迎えするのは、まだ何もなされていない幼子のこのお方で、間違いないのでしょうか。

だれよりも先に「このお方で間違いない」と告げた人がいました。「洗礼者」と呼ばれたヨハネです。主イエスにも洗礼を授けたヨハネは、自分が捕らえられると、自分の弟子たちを主イエスのもとに行かせました。「**来たるべき方は、あなたでしょうか**」と尋ねさせました。主イエスのもとに行き、お会いし、教えを聞き、そのお働きを見れば、このお方こそ「**来たるべき方**」、お迎えすべきお方だと、わかるからです。

わたしたちも、来るべき方、御子のもとに行きましょう。家族や友人が御子とお会いできるよう、「喜び」の知らせをお届けしましょう。

「何を見に行っただのか？」

待降節に入って以来、わたしたちの教会は三週続いて、訃報を耳にすることになりました。殊に先週早々の知らせは、多くの方にとって大きな喪失感をもたらすものであったことでしょう。8年前まで32年間にわたってご夫妻でこの教会に仕えられた前任の大島力牧師が、71歳で逝去されたのです。

葬儀の執り行われた阿佐ヶ谷教会には、石神井教会からも多くの方が参列されました。阿佐ヶ谷教会は、大島牧師が神学生として教会生活を送り、伝道師としても三年間仕えられ、石神井教会を離任された後には会衆の一人として出席されてきた教会です。そもそも石神井教会は、66年前に阿佐ヶ谷教会から生み出されたのです。その阿佐ヶ谷教会で執り行われた葬儀に参列して、わたしたちは、あらためて大島力牧師がどのような方であったのか、どのような教会の交わりと祈りの中から送り出され、石神井教会に仕えられたのかを知る手がかりを与えられたように思います。

葬儀説教の中で、司式された古屋牧師は、大島力牧師の信仰を幾度も「預言者的な信仰」と言い表されました。大島牧師が研究者として旧約の「預言者」をライフワークとされていたことに基づいてのことですが、事実、そのような信仰者としての生き方、牧師としての働き方をしてこられたと、同じ時代を歩まれた古屋牧師はご覧になられていたのでしょうか。

「預言者」は、神の御言葉を告げ、神の実現してくださる希望を指し示す者です。自らの言葉を売り物にするのではなく、自らを指し示すのでもなく、神に遣わされた使者として、与えられたときに、与えられたところで使命を果たすのです。そして、与えられた使命が尽きれば、去り行くのみです。

今日の福音書日課で、主イエスは人々に問いました、「**あなたがたは、何を見に荒れ野へ行ったのか**」。「洗礼者ヨハネ」を何者だと見たのか、と問われたのです。「**何を見に行っただのか。預言者か。そうだ、言うておく。預言者以上の者である**」。その人は、偉大な者です。主イエスをして、そう言わしめました。けれども、主イエスは、その人を指して「この人を見よ」とはおっしゃいません。こう言われるのです、「**天の国で最も小さな者でも、彼よりは偉大である**」と。あの偉大な人は、人の目を惹き付ける「**風にそよぐ葦**」でも、人々の耳目を集める「**しなやかな服を着た人**」でもありません。その人は、「**天の国で最も小さな者**」を指し示すために来たのです。「**最も小さな者**」を「**偉大**」な者として指し示すために、来たのです。

「洗礼者ヨハネ」は、牢につながれ、もはや人々の前に立つことはありません。けれども、なお弟子たちに「**来たるべき方**」を指し示します。「**天の国で最も小さな者**」としてお生まれになり、「**小さな者**」と共に歩まれ、「**小さな者**」として死に行かれたお方を、指し示し続けているのです

主はすぐ近くに！

悲しみの知らせの重なる待降節であっても、わたしたちは、この先に御子のご降誕の期節を迎える備えを進めなくてはなりません。ご降誕を祝う喜びは、すでに始まっています。使徒パウロは、言うのです、「**主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。…主はすぐ近くにおられます**」。

待降節第三主日を、教会は「喜びの日曜日」と呼んできました。その日である今日の午後、わたしたちの教会は、子どもたちのために、一足早くご降誕の祝いを始めます。子どもたちとご降誕を喜び、祝うのです。以前のように子どもが多く集まる時代ではないとしても、わたしたちは、こうして子どもたちのためにご降誕を喜び祝うことをやめてしまうことはないでしょう。子どもたちに、また多くの方に、「喜び」の近いことを告げて、幼子としてお生まれの御子を指し示さなければならないからです。「喜び」をもって、ご降誕の御子のもとへとお連れしたいのです。

洗礼者ヨハネは、神の福音を告げ、来るべき方を指し示すことに徹しました。そうであればこそ、ヨハネは、人々と**食べも飲みもし**なかったのです。旧約の「**ナジル人**」のように、酒を飲まず、肉を食わず、イナゴと野蜜を口にするだけだったと伝えられています。人々と喜びの祝宴を共にすることはなかったのです。「**預言者**」に徹したのでしょうか。いいえ、「**預言者以上の者**」であり続けようとしたのでしょうか。

けれども、わたしたちは、喜びを共にするように招かれています。ヨハネの指し示したお方を、すでに見ているからです。そのお方のもとに、連れて来られているからです。このお方は、喜びの祝宴に、わたしたちすべての者を迎えてくださるでしょう。たとえ、人から「**見ろ、大食漢で大酒飲みだ**」と揶揄されても、このお方は、わたしたちと共に飲み、食べ、喜び祝うことをお望みなのです。すべての者が、その祝宴の交わりに加えられることを、願ってくださっているのです。

洗礼者ヨハネは、捕えられ、去り行きました。ただ、御子のご降誕を指し示して。主イエスを指し示して。

その洗礼者ヨハネは、いつまでも記念されるでしょう。けれども、わたしたちは、洗礼者ヨハネのもとに行くではありません。指し示された主イエスのもとに行くのです。主イエスのもとで、洗礼者ヨハネと共に、このお方を指し示し続けるのです。

このお方のもとで、「**最も小さな者でも…偉大である**」とされる喜びの祝宴が始まります。幼子のような小さな者を喜び祝う交わりが、始まります。

「**主はすぐ近くにおられます**」。御子ご降誕の祝い、喜びの祝いは、間もなくです。